文部省推薦圖書時報

文部省編

第七輯

631
190

631-190
1200501541258

631
190

昭和十三年三月

文部省推薦圖書時報

第七輯

文部省

631
190

凡例

一、本時報は昭和十二年一月より同十三年二月迄の間に於て推薦せる圖書に就て其の概要と推薦の趣旨とを紹介するもので昭和十二年三月刊行のものに次ぐ第七輯である。

二、第一輯乃至第六輯に收錄せるものは其の圖書名を附錄として卷末にをさめた。詳細は當該時報に就て見られたい。

昭和十三年三月

文部省社會教育局

同局調査室 寄贈本

目次

育ての心……倉橋惣三著（一）
學生と教養……鈴木利貞編（三）
日本文化と佛教……辻善之助著（四）
日本建築史講話……關野貞著（五）
傳教大師……鹽入亨忠著（七）
吉田松陰……玖村敏雄著（九）
回顧七十年……正木直彦著（一一）
東洋人の旅……齊藤清衛著（一三）
帝國憲法の制定と歐米人の評論……金子堅太郎著（一四）
日本外交論……佐藤忠雄著（一五）
新農村の基調……那須皓著（一七）
新興日本工業と發明……大河内正敏著（一九）

近代科學……佐藤信衛著(一〇)
天文と宇宙……荒木俊馬著(一三)
芳賀矢一文集……芳賀檀編(一三)
短歌入門……土屋文明著(一四)

附錄

第一輯收錄の推薦圖書名……(二六)
第二輯收錄の推薦圖書名……(二七)
第三輯收錄の推薦圖書名……(二九)
第四輯收錄の推薦圖書名……(三〇)
第五輯收錄の推薦圖書名……(三三)
第六輯收錄の推薦圖書名……(三四)
圖書推薦規程……(三六)

育ての心

倉橋惣三著

本書の標題と序文とはよくその內容を概括して餘す所がない。よつて序文を通じて內容の一斑を窺はうと思ふ。

標題は著者苦心の命名になるものと考へられるが、この標題こそは「幼兒教育」でもなく幼稚園教育でもなく、「愛兒の教育」でもなく、著者の謙虛な育ての心を、新鮮な內容を、輕快な筆致を象徵するに相應しいものである。「育ての心」については序文の冒頭に「自ら育つものを育たせやうとする心。それが育ての心である」と說明し、「世にこんな樂しい心があらうか。それは明るい世界である。溫い世界である。育つものと育てるものとが、互の結びつきに於て相樂しんでゐる心である」と咏嘆して居られる。「育ての心は役目でもなく、義務でもなく、誰れの心にも動く眞情である」が「この眞情が最も深く動くのは親である。次いで幼き子等の教育者である。そこには抱く我子の成育がある。日々に相觸るゝ子等の生活がある。斯うも自ら育たうとするものを前にして育てずしてはゐられなくなる心、それが親と教育者の最も貴い育ての心である」

と述べて親と教育者の崇高なる眞情を禮讃し、使命の重大さを暗示して居られる。

最後の「それにしても、育ての心は相手を育てるばかりではない。それによつて自分も育てられてゆくのである。我が子を育てゝ自ら育つ親、子等の心を育てゝ自らの心も育つ教育者。育ての心は子どものためばかりではない。親と教育者とを育てる心である」といふ一節は本書を一貫する著者の態度であつて、親や教育者に對する著者の贈り物であらうか。

內容は「子ども達の中にゐて」「母ものがたり」「子どもの癖しらべ」「子どもの心」「いろいろの子ども」「子どもの相手」「名畫の子ども」の七項に分けられる。序文には「この本は體系を辿つて書いたものではない。理論に追はれて書いたものではない。子ども達と母達とに接しながらその實際と實踐のまゝに卽して書いた實感の書である」と述べられてゐるが、體驗を語り、實際指導を主とするこの種の書として讀者に訴ふる處大なるものがあらう。

右の如く世の親教育者はもとより、眞に子供を愛し、理解し、一國繁榮の基礎を培はんと念ずる人々の一讀すべき好著である。

（昭和一一、一二、八　刀江書院　四六判三九二頁　一、五〇）

學生と教養

鈴木利貞編

近時、青年殊に知識的な青年間に「教養」の問題が眞面目に考へられ始めたことは喜ぶべきである。けだし、教養の問題は畢竟人間の問題に他ならない。あらゆる文化的所產が人間に於て綜合されたものが教養である。教養ある人とは、其の意味での文化人のことであらう。そして文化は、かゝる教養高き文化人の生活層を地盤としてのみ正しく發展するのである。

本書の序文に於て河合榮治郎氏は「今日の教育者の爲すべき任務は課題に對する青年の解答に對して、何らかの援助を供與することにある」といひ、「先づ青年に與ふる一般的助言として安倍能成氏を煩はし、次で青年の教養を高めるものとして、哲學・倫理學・文學・歷史・傳記・自然科學・社會科學を選擇し、之等のものがいかなる意味に於て青年の教養と交涉するかを述べることとして、桑木・倉田・谷川・大類・鶴見・石原・蠟山の諸氏に求め、更に青年時代の成長の自傳的敍述を、美濃部達吉・東畑精一・高田正・木村健康・上田達雄の諸氏に委囑し、年齡と時代とを異にした夫々の人々の特徵を浮彫りに示すことを企てた。たとへ學生々活を送らないものにも、

人間の成長の記述として役立つであらうと思ふ。最後に青年に對する家庭よりの言葉として婦人の中に人を求めて、野上彌生子氏によつて母としての注文を聞くことが出來た。」といつてゐる。これによつて既に本書の意圖と内容とは充分知ることが出來ると思ふ。

本書は標題にも明かな通り主として學生(それも高等學校以上の)を對象として書かれてゐるが、一般知識的な青年はもとより、この問題に關心を有つ知識人は是非一讀してよい本である

(昭和一一、一二、一〇　日本評論社　四六判四六二頁　二・〇〇)

日本文化と佛教

辻善之助著

本書は佛教渡來以後江戸時代までの日本文化と佛教との關係を、佛教が日本の文化に及ぼしたる影響といふこと並に佛教が如何に日本文化へ融合したかといふことの二つの意味から觀察したものである。詳言すれば、本書は佛教の盛業或はその日本化の次第とそれぞれの時代文化との關係交渉を系統的に敍說したものであつて、殊に平安以後就中鎌倉・室町時代の樣相を細說してゐる。特に「鎌倉時代前後に於ける地方文化の發達と佛教」「室町時代地方文化の發達と佛教」の二章、それと「佛教と社會事業」の章とは、本書の一大特色をなすものゝ如く思はれる

本書の敍說は、流石に達識の士たるを思はせるもので、豊富に文獻を引用し、時々は傳說・逸話の類をあげ、自由自在に說いてゐる。而も聊かも難解煩雜の嫌ひなく、まことに平明であり、讀んで面白く、且つよく纒まつて出來てゐる。

この種の著は、部分的に專門の書は數多く出てゐるであらうし、佛教史として全般に亘るものも多くあるがこのやうに通俗平易を旨とし、且つ全般に亘つて系統的に敍述されてゐるものは、極めて稀なやうである。本書はその道の專門權威者がその意圖をもつて著はされた良書として推薦する次第である。

(昭和一二、六、二八　大日本圖書株式會社　菊半截二九四頁　一・〇〇)

日本建築史講話

關野貞著

本書は著者が昭和四年武藏高等學校民族文化講演に於て試みられた日本建築史の講話を筆記整理し、博士の薫陶を受けた工學博士足立康、文部省囑託大岡實兩氏の嚴密なる校閲を經て上

梓されたものである。

内容を序論と各論とに分つ。

序論に於ては概括的に日本建築の特色及びその樣式の發達を天然的素因と人爲的素因とに分ちて說明する。天然的素因とは日本の地形、地質、氣候であり、人爲的素因とはわが國の國體宗敎、國民の慣習、氣質である。この兩素因は縱となり橫となり、わが國特有の建築樣式の發達を見るに至つたといつてゐる。

建築界將來の見通しについては材料上より木造建築の時代は將に過ぎ去らんとし、慣習上よりは追々坐る慣習を廢し、その建築も亦腰を掛けるやうに移つて行くであらうといつてゐる。

しかし日本建築と西洋建築の根本的差異は、材料に於て前者が主として木造建築であるに對して、後者は殆んど煉瓦造或は石造であり、氣候風土の關係よりして前者が徹底した開放的避暑的建築であるに對して、後者は密閉的な防寒的建築であり、前者が坐る慣習の上に建てられた建築であるに對して、後者は腰を掛けるやうに造られた建築である。從つて今後西洋建築がわが國に多く用ゐられるに至つても、この三點を考慮しなければ、わが國の氣候風土に適應した眞の日本建築となる事は出來ないと斷言してゐる。

各論に於ては原始時代乃至明治時代に分ち、各時代に所ける建築樣式の特色を實例について簡明に說述してゐる。附錄に「日本建築重要遺構一覽」「建築用語解說並附圖」がある。

わが國到る處に名所舊蹟あり、其の中心をなすものは主として建築に關聯を有して居ると言つても過言ではない。これ等の建築について本書程度の常識が持たれることは國民の敎養上望ましいことゝ信じ推奬するものである。

（昭和一二、七、二九　岩波書店　四六判二五八頁　一・二〇）

傳敎大師

鹽入亮忠著

傳敎大師が弘法大師と共に平安朝時代に於ける佛敎界の二大明星であることは普く知られて居る所である。が、傳敎大師の叡山開創の眞意義、桓武天皇の平安遷都の關係、叡山佛敎と奈良佛敎との敎義並に實踐上の相違、鎌倉の新佛敎との關係、我國文化史上に於ける輝かしき業蹟等については、あまり理解されて居ないやうである。

本書はまづ「生誕と幼年時代」「少年時代」「佛舍利の神祕」「受戒」「南都の佛敎」「革新の機運」「平安遷都」等の項に於て、時代的背景の下に傳敎大師出現の意義を詳述してゐる。次に「叡山開

創」「願文の製作」「山上の修學」「叡山開創の前後」「一切經の書寫」「懷疑の解決」「法華十講」「高雄講經」「入唐前の佛教觀」「入唐求法」「歸朝復命」「天台宗の公認」等に於て、大師十九歳より四十歳に至る二十年餘新佛教の獨立のための苦鬪史前期を語り、最後に「沈默と修練」「建設の第一歩」「德一との論諍」「大師の臨終」「滅後の叡山」等の項に於て、彼の目指した大乘戒の獨立、天台宗の完全な獨立に至るまでを敍述してゐる。その他「文藻書彫刻」「天師の外護者と門弟」「大師の撰述」「年表」等すべて正確な史實典據を明かにし、大師一代の全貌を紙面に躍如たらしめてゐる。

著者は大正大學教授、多年傳教大師の教學研究に從事せる人である。純研究的論文の出版を他日に讓り、大師比叡山千百五十年の記念出版としてまづ啓蒙的な本書を公にせられたのであるが、佛教の日本化の基調、これに對する大師の位置を知らしむることは、輕薄なる擬似宗教の横行する現代に於ては極めて必要の事に屬すると信じ本書を推薦する次第である。

（昭和一二、五、一　傳教大師奉讃會　四六判五四八頁　二・〇〇）

吉田松陰

玖村敏雄著

松陰に關しては前に廣瀨豐氏の「吉田松陰の研究」を本省から推薦してゐる。今、重ねて本書を推薦するに當つて前書と比較してその特異の點を明かにして見る。

廣瀨氏の「研究」は主として松陰の遺著を通じて松陰を知らうとしてゐる。無論それは正しい態度であるが、只、論著や詩歌等に表現される人間は相當に理想化されてゐることを思はなくてはならない。若しそれ等のもののみから人物を判斷するならば、そこには理想的偶像的な英雄が出來上る虞れが多分にあり得るのであつて、それでは松陰自身も既にいつてゐるやうに「凡人の模範」とはなり得ない。無論廣瀨氏も「ありのまゝの松陰」を見ることに努めてゐるのであり、事實そこに描かれた松陰は決して偶像的英雄ではないが、それにしても其の人間を知る爲には、何よりもその人の生活そのものを見ることが最も大切だと思ふ。

玖村氏は松陰の「家庭人、國家人として生ひ立ちつゝ求道生活に卽して生長して行つた思想過程に重きを置き、それと行動、殊に教育者的行動との關係を失はぬやう注意した」といふ態

度である。

試みに兩者の目次を見れば、廣瀨氏の「研究」が、

一、事蹟　二、著書　三、學說　四、教育思想と實際

の如き編制で述べてゐるのに對し、玖村氏は、

一、山鹿流兵學師範時代　二、遊歷時代　三、第一回在獄時代　四、幽室時代　五、再獄時代　六、殉難前後

といふ順序で述べられてゐる。

たゞし、この兩者の態度の相違はいふまでもなく比較的のことであつて、決して截然と對立するのではない。けだし、松陰にとつて、日記を綴り、書簡を認め、詩歌を作るのはもとより學問的な著述も凡べて彼の實踐的生活の一部、しかも最も重要な部分に他ならないのであつて玖村氏も無論松陰の人間を見る爲にそれ等のものを坐右から離すことは出來なかつた。

それと、も一つは、本書の著者は山口縣教育會の企てた吉田松陰全集の編纂事業に關係して多くの正確な且新らしい資料を見てゐるので、松陰研究上確かに一歩を進めてゐるものと認められる。

（昭和一一、一二、二〇　岩波書店　四六判三九七頁　一・五〇）

回顧七十年

正木直彦著

本書は去る二月十三日著者の鄕里堺市の熊野小學校に於ける明治天皇行幸六十周年記念式に於て試みた懷舊談を基礎として七十年を回顧したものである。

回顧談は著者七歲の慶應四年の鳥羽伏見の戰、堺事件の目擊談、明治四年頃の「菊御紋章」の塗りつぶし、廢佛毀釋の印象等維新の混亂時代を髣髴せしむるに足るものである。

斯うした時代に人となつた著者は早くも明治十年十六歲にして明治天皇行幸の際、天顏に咫尺して書を讀むの光榮に浴したのである。後明治三十四年東京美術學校長となり、明治四十年以後文展への行幸啓に際して御下問に奉答し、昭和五年勳一等の御親授を拜した著者の榮譽は最も輝かしいものである。

この間に於ける著者の公人としての活動、師事した明治時代の碩學、親しく謦咳に接した相將に對する回顧談等はこの光輝ある時代の側面史を遺憾なく物語つてゐる。

著者の明治、大正、昭和文化への貢獻は廣汎に亘るであらうが、その最も顯著なるものとし

ては古美術品の蒐集保存と美術行政及び美術教育に對するものをあげることは不當ではあるまい。

名作蒐集に對する熱意はその思出(二)にあます所なく示されて居り、東京美術學校長として教授の詮衡に對する態度、帝國美術院長として文展をめぐる諸問題に對する裁斷は長く我が美術史の參考資料ともなるであらう。

その他外遊に於ける見聞記、美術家の月旦中には處世上幾多の示唆を含んで居るが、特に「神宮繪畫館と畫家の苦心」「白山松哉と板谷波山」の如きはかの陶工柿右衛門の苦心を思はしめるものがある。

(昭和一二、四、二五　學校美術協會　四六判四一八頁　二・五〇)

東洋人の旅

齋藤清衛著

本書は特異なる國文學者たる著者の異色ある歐羅巴紀行である。「吟爾賓の朝」より始まる「ロシヤ横斷記」、ポーランドを通つて獨逸に入り、ベルリン滯在の「ベルリン記」、北歐フインランドに遊ぶ「北歐遊記」、「北歐よりドイツへ」再び歸つて「西南ドイツの町々」を見、オースタリを通過してイタリーに至る「南歐紀行」、更に「佛句を巡りて」英國に渡り、ロンドン、アイルランド、スコツトランドの旅を終へて再びロンドンに歸り、アメリカに渡らんとするまでの紀行である。アメリカ記は他日を期して書くといふ。

「すでに何十種と出されてゐる歐米巡遊記の中では、この貧しい紀行すら、なほ、特質を有するものであることを私かに自惚れざるを得ません。」と著者はその「序」でいつてゐる。本書の特色の第一は、觀察が濃やかであるといふことである。著者は出來るだけ乘物を用ゐないで、歩いて細かに物を見てゐるのである。第二の特色は日本人のあまり行かない地方、而も努めて田舍を見て廻るといふことである。これはおそらく著者の人生觀に結びついてゐることであらう。第三の特色ともいふべきは、著者は至るところで文明批評風の感想を漏らしてゐることである

本書は讀者に親しみ深い異國の旅の案内書たるの感を抱かしめ、かつ親しく歐洲の人情風俗文物に接する思ひあらしめる良い紀行の書として弘く讀書階級に推薦する次第である。

(昭和一二、五、二〇　春陽堂書店　四六判四三八頁　一・八〇)

帝國憲法の制定と歐米人の評論

金子堅太郎著

帝國憲法も今年は五十周年を迎へる。何れ二月十一日には憲法發布滿五十年を記念していろいろの國家的な催しがあることと思はれるが、それに前だつて國民一般に帝國憲法の精神を徹底せしめて置くことは何にもまして意味あることであらう。

いふまでもなく帝國憲法は明治天皇の欽定し給ひしところのものである。日本國民としてかりそめにもこの憲法を輕んずる如き考へ方をするものがあつてはならない筈である。

本書は金子伯が昭和九年七月文部省に於てなされた講演の筆記に增補加筆して出版されたもので、その主旨も徹頭徹尾帝國憲法制定の際起草者が日本の歴史と國體とを尊重したので、日本憲法が聊かも我が國體に悖るものでないことを明らかにせんとしたものである。

金子伯の謹話を聞き、明治天皇が憲法を制定し立憲政治を確立し給ふについて如何に大御心を注ぎ給ふたかを拜承するならば（本書一六六頁以下）、此の「不磨の大典」をして益々その本然の姿に於て光輝あらしめ立憲政治有終の美のために粉骨碎身することこそ、この優渥なる天恩

に應へ奉るべき日本臣民の道であることを覺るであらう。

また憲法を起草せられた四人の内唯一人の生存者であられる金子伯御自身の筆によつて憲法制定當時の事情を傳へられた本書は憲法解釋資料として貴重なものである。

（昭和一二、一一、一八　日本青年館　四六判三九五頁　一・三〇）

日本外交論

佐藤忠雄著

本書は昭和十年夏有爲の前途を惜しまれながら物故せられた在米大使館二等書記官佐藤氏の遺著である。

佐藤氏は前に瑞西に在勤されたこともあり、また多年外務省情報部にあつて國外國内の情勢に通曉してをられ、殊に情報部第三課長として國内の外交知識普及に力を盡し、講演にラヂオに一般國民に呼びかけると共に、世界の輿論の指導にも多大の貢献をせられたのであつた。

著者が本書に於て述べんとするところは、日本の外交が終始一貫常に人道と正義とを目標としつゝ、しかも具體的な日本の歴史と國民生活の實情に卽して行はれ來つたものだといふこと

である。以下極めて簡單に本書の內容を紹介することにする。

第一章に於て、日本外交政策の沿革と現狀を概說し、外國の誤解と宣傳にもかゝはらず日本外交が如何に非侵略的であり、平和を熱望し來つたかを論證し、歐米諸國の日本外交に對する「依然たる治外法權的解釋」を以て東洋の平和を擾亂する一切の禍根であると斷ずる。

第二章に於て、帝國外交の基調を檢討し、進んで日本外交の進路如何に說き及ぶ。

第三章では更に進んで日本外交の汎世界性が說かれる。日支關係を中心として動く外交の舞臺は實は日英關係であり、日米關係であり、日露關係等々である。更につきつめれば、それ等の動きの凡ては、結局は世界の歷史的必然の發展の各種相に他ならないのである。ファッショの出現も、ナチスの擡頭も、そして滿洲國の成立も。かくて世界は今や「武裝の平和」の下におのゝいてゐるのだ。歷史は繰り返す。世界は再び一九一四年前の狀態に返つてゐると著者は叫んでゐる。

第四章、第五章は講演の速記を收めたもので、最近に於ける國際關係並にその情勢の鳥瞰である。

（昭和一一、一二、五　國際經濟研究所　四六判二五二頁　二・〇〇）

新農村の基調

那須　皓　著

本書は初めに「緒言」を揭げ、「國運の岐路に立つ」「新農村をつくるもの」の二節となしてゐる「新農村をつくるもの」はあくまでも農民自身であり、「目に見ゆる現狀維持の勢力、目に見える舊套墨守の氣風、この障壁を打破して上からの指導と下からの熱誠とが直接手を握り、力を協せて進むことは今日何よりの急務である。新農村の建設は論議の結果忽焉として現れるものではなく農民現實の動きに依つて步一步實現されてゆくのである。」といふのが、本書全體の基調をなしてゐるのである。

次にいよ〳〵本論に入り、まづ「農村現狀の鳥瞰圖」を與へ、次いで「農村問題の史的發展」の概略を敍述し、第三章より農村問題の主要なるもの、卽ち「小作問題」「農產物價格の問題」「農業信用と負債整理」「新日本の農業及び農經營」「人口、移民問題」等についてその概要を說明して、問題解決の方向を示してゐるのである。これらの論述においては、あくまでも現實に卽し現實そのものゝ中より現はれて出てゐる解決の動向を看取してゐるのである。決して著者自身

の主觀的主張に走るといふことをしないのである。次に「農村經濟更生運動」の由來、經過、成果、進展を論究して、最後に農村文化問題に及び「農村に於ける生活改善、社會施設、勸業施並設びに教化の問題」を論究してゐる。本章は說くこと簡單ではあるが、實は本著者の最も力點をおくところであつて、著者が屢々顧る「人間の改良案の出發點にして又到達點なり」といふ根本原理より見て、これは當然のことである。最後に「結語」として以上の考察を要約し、現狀より將來への發展性を述べてゐる。

本書は大要以上の如きものである。所論簡潔にして要を得てゐるし、著者の熱誠は全篇を通貫してゐる。著者の觀察主張また適正且つ公明正大である。本書は「新興日本叢書」の一編として青年讀物として發刊せられたものであるが、農村青年は勿論一般國民も現代の農村問題に一般的理解を得るために必讀のものと思ふ。

（昭和一二、五、五　日本青年館　四六判二七五頁　・九〇）

新興日本の工業と發明

大河內正敏著

同じ著者に依つて昭和九年四月「農村の工業」が出版せられ本省の推薦するところとなつた。本書も論旨に於て前著と異るところはないが、前著が著者の抱かるゝ産業問題に關する種々の抱懷中、主として題名の通り農村の工業化を論述したものであつたが、本書に於ては一般工業就中精密機械工業の現狀及び將來並に發明と發明の工業化の問題に重點をおいて論述されてある。又前著が論文集であつたのに對して本書は首尾一貫した記述に依つてゐる。

第一章「科學と工業」、第二章「技術家の頭腦」、第三章「發明の工業化」、第四章「熟練と機械」第五章「工業と他産業」、第六章「農村の工業化」を內容としてゐるが、著者多年の持論である科學、發明、合成化學、精密機械等を打つて一丸とした智能主義工業を力强く表明したものであつて、特に第二章及び第三章に於ては、工業發達の基礎をなす科學知識普及の問題、研究機關の問題を論じ、幾多すぐれた外國の例を示して我が國識者に反省を促してゐる一方、發明については發明とその工業化といふことが全く別個のものであり、發明家が同時に事業家たらんと

することの非を唱へ、發明とその工業化は各々異つた二人の手によつて完成さるべきことを主張してゐるのである。勿論個々の論には種々の問題はあるであらうが、産業の合理化、國内工業の振興について論じた卓拔な一具眼者の主張として我々國民の一讀を必要とするものである

（昭和一二、一、一　日本青年館　四六判二八九頁　・九〇）

近代科學

佐藤信衛著

今日われわれが科學と呼んでゐるものは西洋の近代科學であつて、それはわれわれに賴るべき唯一のものとして理性の使用を敎へたのである。さうして合理主義や實證主義がわれわれに科學思想の生れる途を指し示す。

著者はわれわれ一科學を學ぶべき理由として、明治以後その折々に顧憂された三つのことがあるとする。一つには、知識として、儒學や國學などの知らなかつた最も知識らしい知識として。二つには技術として。三つには弘く新らしい人心を耕鋤する合理主義の典型として擧げるのであるが、著者が本書に强調するのは最後の理性耕鋤の問題である。著者は思想を培養するのとして科學の精神を云ひ、その質の純粹でなければならぬことを云ふ。

本書は最初に於てさういふ純粹な科學の眼や心を鍛へるものとして近代科學の方法について述べる。卽ち科學を眞に作り、またこの精神を正しく知るには、科學活動の結果に過ぎない個々の知識よりも、科學活動そのものを已に敎へて知識はそれによつて自づから生ずるやうにしなければならないといふ見地から、人はどうして科學者たり得るか、どう見、またどう考へるのが科學的なのかを詳しく考察してゐる。

次に現代の自然觀の基礎となる物理學について、その最近の發達とその導いた思想とを述べてゐる。卽ち原子論、光學史、相對性理論、波動力學、量子力學等の原理を論究し、近代科學が或る制限を發見することによつて、科學を理解する一つの途としてゐる。

本書は科學を思考の方法として「考へること」を敎へたもので、ポアンカレの「科學と方法」や「科學の價値」と同樣、非常に六ケ敷い問題を明晰な解說によつて考へた珍らしいものである。高級な意味に於ける「科學入門書」であるといはなければならない。今日の科學の精神を考へ、科學の認識を深める上に必要な條件を備へた良書である。

（昭和一二、九、二八　日本評論社　四六判三二九頁　二・〇〇）

天文と宇宙

荒木俊馬著

本書は京都帝國大學助教授である著者が、數年間に亘つて試みられた天文に關する通俗講演並に科學雜誌に執筆されたものゝ中から八篇を選集し、之を適當な系統の下に順序を立て、新に加筆修正して出版されたものである。

內容は八篇に分たれてゐる。中、第一篇「天文學の起源」、第二篇「學藝復興と近代天文學の黎明」は何れも天文學の起源については「讀者諸君が東洋人である事の爲に」と但書をつけて材料の採收を主として東洋に求めてゐる。第三篇「天文學の基礎知識」は標題通り、星・太陽・月の位置とかその諸現象、萬有引力、天體力學等、天文學の基礎知識に關して平易に述べたものである。本書の核心をなすとは思はれるのは第四篇以下で、目次を掲げれば第四篇「現代の宇宙觀」第五篇「星辰進化の問題」、第六篇「太陽の黑點」、第七篇「星辰の內部構造」、第八篇「宇宙構造論」となつて居り、何れも近代の宇宙物理學に關するものである。

「序」に著者は「本書は勿論通俗天文書である。然し其の「通俗」なる意味は所謂天文學の專門知識に關して云ふ可きで、本書それ自體は必ずしも通俗的ではないかも知れない」と云つてゐるが、全くその通りで、本書は所謂通俗書ではない。學術的に而も平易に說いたものは世に少いのである。その意味で本書は誠に優れた作である。

（昭和一二、二、一八　恒星社　四六判三五〇頁　二・八〇）

芳賀矢一文集

芳賀檀編

芳賀矢一博士はいふまでもなく明治の國文學の草創時代に於ける先驅者であつた。先生の生涯は近世の國學の傳說に根ざして我が國文學、日本學の啓蒙樹立に捧げられた。その國學の開拓に當つては、西歐の學問にも精通し、すべてを綜合する博覽强記の人であつた。今度、先生の歿後十年に當りそれを記念するために發刊された「芳賀矢一文集」は先生の巨大なる足跡を追慕させると共に、この一代の國學者の功績を再考させるものである。

この文集は千頁に垂んとする大冊であるが、講演に說かれ或は雜誌に發表された國學、日本文學に關する論文あり、外遊の隨筆あり、漢詩、和歌、俳句等あり、また未發表の日記、書簡

等の類まで集められて、この一卷にしてよく先生の聲咳に接するの感あらしめるのである。その國學に寄する熾烈なる情熱と古典に對する該博なる蘊蓄を隨所に窺ふことが出來る。全卷に於て稍々雜多なものも集めた感があるが、先生の日本に寄せる文化的精神の高次の展開をみるのである。

現下我が國では復古の精神が興り、朝野を擧げて、日本の特性を究め、日本的なるものを知らうとする機運が漲つてゐる。この時機に於て國學者芳賀矢一博士の文集を讀むことは、日本人として歸一すべき文化の大道を知り、日本精神の在り方を感得する緣となるであらう。

（昭和一二、二、六　富山房　菊判九九一頁　三・五〇）

短歌入門

土屋文明著

「本書に收めた各篇は昭和六年から最近までその時々に、雜誌講座等の編輯者の出題に應じ提示された範圍内で、初學者乃至はこれから作歌を始めようとする人々を大凡目標として書いたものである。」（「小引」冒頭）

内容目次は次の如き項目から成つてゐる。

「短歌手ほどき」「短歌の味ひ方作り方」「添削と批評」「初心者のために」「應募歌選評」「短歌概論」「現代短歌指針」「昭和十年の歌壇」。

著者はいふまでもなく「アララギ」派の重鎭であり、現歌壇の雄である。「アララギ」の歌道は謂ゆる寫生道であるから、著者の立場もそれであることは言を俟たない。

短歌入門書は世に數多いのであるが、本書は現在まで世に出てゐるものゝ中で第一流に屬するものといつていゝであらう。本書中「短歌概論」は初學の者には稍々高級であるかも知れない本書中においても最も難解のものである。その他のものは項目のとほり何れも初學者向のものであつて、懇切丁寧を極めたものである。「現代短歌指針」は明治以後今日に至るまでの短歌の歷史を簡明に語つたものである。

短歌はいふまでもなく國民的のものであつて、短歌を愛好する人は實に多く、國民の教養上重要な意義を有するものである。本書はそのための良き入門書として推奬する次第である。

（昭和一二、四、一〇　古今書院　四六判三五六頁　一・五〇）

附錄

第一輯收錄の推薦圖書名

書名	著者	發行所	定價
信仰とその反省	白井成允	大雄閣	二・〇〇
日本經濟思想史	瀧本誠一	日本評論社	一・五〇
人情亡國論	太田正孝	萬里閣書房	一・五〇
實踐哲學概論	西晉一郎	岩波書店	二・二〇
野口英世博士傳	橘輝政	第一出版社	一・三〇
人文の基調としての佛教	高楠順次郎	大雄閣	二・〇〇
兩親のための一般心理學	松本亦太郎	先進社	二・〇〇
東洋倫理概論	安岡正篤	玄黃社	二・四〇
思想と國家	深作安文	目黑書店	四・〇〇

哲學講話	得能文	第一書房	二・五〇
母のための教育講話	小西重直	先進社	一・五〇
氣象と人生	藤原咲平	鐵塔書院	一・八〇
大地のはらわた	西村眞琴	刀江書院	二・五〇
新興ドイツ魂	池田林儀	萬里閣書房	二・〇〇
自然科學概論	石原純	岩波書店	三・五〇
外交餘錄	石井菊次郎	同	三・八〇
深田康算全集（第三卷）	深田康算	同	五・〇〇

第二輯收錄の推薦圖書名

書名	著者	發行所	定價
父母の態度	松本亦太郎	日本兩親再教育協會	一・八〇
女子教育の理念	吉田熊次	同文書院	三・八〇

續冬彦集	吉村冬彦	岩波書店	二・〇〇
青丘雜記	安倍能成	同	二・〇〇
生物學叢話	駒井卓	改造社	二・五〇
金屬と人生	加瀨勉	內田老鶴圃	三・五〇
海洋科學 海をひらく	丸川久俊	仁川堂	二・五〇
日常生活の生理學	加藤元一	岩波書店	一・八〇
判例百話 —法學入門—	穗積重遠	日本評論社	二・〇〇
近代世界外交問題解說	芦田均	タイムス社	一・五〇
氷河と萬年雪の山	小島烏水	梓書房	二・七〇
峠と高原	田部重治	大村書店	一・五〇
吉田松陰の研究	廣瀨豊	武藏野書院	一・七〇
マクドーナルド	齋藤博	岩波書店	一・五〇
ダーウヰン傳	駒井卓	改造社	〇・五〇

世界史論講	坂口昂	岩波書店	五・二〇
日本文化史	笹川種郎	雄風館	一・五〇
天正遣歐使節記	濱田青陵	岩波書店	五・五〇
大津事件顚末錄	兒島惟謙述 花井卓藏校	春秋社	一・八〇
近代哲學概觀	大島正德	至文堂	二・八〇

第三輯收錄の推薦圖書名

書名	著者	發行所	定價
哲學の話	大島正德	寶文館	一・二〇
現代人の佛教概論	友松圓諦	第一書房	一・八〇
女公子讀本	吉村千鶴子	光宏書院	二・三〇
子供の遊ばせ方	坂內ミツ	吉岡書房	一・五〇
電氣物語	石原純	新光社	一・五〇

第四輯收錄の推薦圖書名

地球	坪井忠二	鐵塔書院	○・八○
我が海軍	海軍研究社	海軍研究社	五・○○
海運夜話	廣幡忠隆	日本海事學會	一・二○
航空讀本	小川太一郎	日本評論社	一・五○
滿洲國歷史	矢野仁一	目黑書店	二・五○
維新史考	井野邊茂雄	中文館	三・○○
勝海舟傳	德富猪一郎	改造社	○・五○
マルクス死後五十年	小泉信三	同	二・八○
師・友・書籍	小泉信三	岩波書店	二・○○
萬葉集概說	佐佐木信綱	明治書院	一・五○
芭蕉の研究	小宮豐隆	岩波書店	三・二○

書名	著者	發行所	定價
佛教聖典	友松圓諦	第一書房	一・五○
法句經講義	和辻哲郎	岩波書店	○・八○
人間の學としての倫理學	阿部次郎	同	三・三○
文藝評論 第二輯 世界文化と日本文化	春山作樹	東洋圖書株式合資會社	二・八○
教育學講義	加藤完治	同	二・五○
日本農村教育	松村武雄	培風館	三・八○
民族性と神話	時野谷常三郎	共立社	二・○○
現代の世界史	朝日新聞社	朝日新聞社	一・二○
日本外交祕錄	東郷彪	實業之日本社	一・二○
吾が父を語る	大河內正敏	鐵塔書院	一・二○
農村の工業	谷崎潤一郎	中央公論社	一・五○
文章讀本	島崎藤村	第一書房	一・五○
文學讀本 秋冬の卷			

黃金蟲	小宮豐隆	小山書店	二・〇〇
地上を行くもの	齋藤清衛	改造社	一・六〇
平野雜筆	森田恒友	古今書院	一・八〇
獨樂園	薄田泣菫	創元社	一・六〇
國劇史概觀	高野辰之	春秋社	二・五〇
人形讀本	日本人形研究會編	雄山閣	二・五〇
音樂の鳥瞰	堀內敬三	中和會事務所	一・八〇
レコード音樂讀本	野村光一	中央公論社	一・八〇

第五輯收錄の推薦圖書名

書名	著者	發行所	定價
西洋哲學史概說	桑木嚴翼	早稻田大學出版部	二・〇〇
續日本精神史研究	和辻哲郎	岩波書店	二・八〇

風土	人間學的考察	和辻哲郎	岩波書店	二・五〇
道	元	圭室諦成	日本評論社	一・二〇
二宮尊德・傳		佐々井信太郎	同	二・〇〇
歐亞點描		下田將美	一元社	二・八〇
沙漠の國		笠間杲雄	岩波書店	一・八〇
感想集 子供と母の領分		鷹野つぎ	古今書院	一・八〇
日本工業政策		吉野信次	日本評論社	二・〇〇
天文學通論		關口鯉吉 鈴木敬信	地人書館	三・八〇
美術と工藝の話		柳宗悅	章華社	二・〇〇
映畫讀本		來島雪夫	書林絢天洞	一・八〇
ゲーテ論攷		木村謹治	伊藤書林	三・〇〇
花鳥草紙		新村出	中央公論社	一・八〇
文學讀本 春夏の卷		島崎藤村	第一書房	一・五〇
文墨餘談		市島春城	翰墨同好會 南有書院	二・三〇

631
190

第六輯收錄の推薦圖書名

書名	著者	發行所	定價
支那思想史	武內義雄	岩波書店	・八〇
更訂國史の研究總說	黑板勝美	同	三・〇〇
更訂國史の研究各說上	同	同	三・五〇
更訂國史の研究各說下	同	同	三・五〇
釋尊の生涯	高楠順次郎	大雄閣	一・三〇
孔子の生涯	諸橋轍次	章華社	一・〇〇
石黑忠悳懷舊九十年	石黑忠悳述 薄田貞敬編	博文館	三・五〇
青年賴山陽	木崎好尙	章華社	一・五〇
法哲學	尾高朝雄	日本評論社	一・八〇
續法窓夜話	穗積陳重	岩波書店	二・五〇
初步國際讀本	平野等	東白堂書房	一・四〇

協同組合研究	本位田祥男	高陽書院	三・五〇
社會教育概論	小尾範治	大日本圖書株式會社	一・〇〇
西洋音樂史	乙骨三郎	京文社	四・八〇
日本文化私觀	ブルーノ・タウト著 森儁郎譯	明治書房	三・〇〇
野の鳥の生態	仁部富之助	巢林書房	一・五〇
野鳥と共に	中西悟堂	同	二・八〇
榮養讀本	鈴木梅太郎 井上秉雄	日本評論社	一・〇〇
空月集	橋田邦彥	岩波書店	二・五〇
タイヤルは招く	大島正滿	第一書房	一・五〇
旅人の眼	川島理一郎	龍星閣	二・五〇
支那小史 黃河の・水	鳥山喜一	刀江書院	一・八〇

631
190

631
190

◎文部省令第二十二號

圖書推薦規程左ノ通定ム

昭和五年九月一日

文部大臣　田中隆三

圖書推薦規程

第一條　社會教育ニ稗益アリト認メラルル圖書ニシテ特ニ優良ナルモノハ本令ニヨリ之ヲ推薦ス

第二條　推薦ヲ受ケタル圖書ニハ文部省推薦ノ文字ヲ記入スルコトヲ得之ガ記入ヲナス場合ニハ推薦ヲ受ケタル年月日ヲ明記スルコトヲ要ス

前項ノ記入ヲナシタル圖書ニ修正ヲ加ヘタルトキハ其ノ發行者ハ遲滯ナク其ノ旨ヲ文部大臣ニ屆出ヅベシ

第三條　推薦シタル圖書ニシテ修正其ノ他ノ事由ニヨリ必要アリト認ムルトキハ推薦ヲ取消スコトアルベシ

第四條　推薦シタル圖書ノ名稱冊數定價發行ノ年月日並著作者及發行者ノ住所氏名ハ官報ヲ以テ之ヲ公示ス推薦ヲ取消シタルトキ亦同ジ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

631
190

1 2 1

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black